

株式会社コバヤシ vol.02

製品化した製品・サービス

抗がん剤曝露防止「一体型輸液ライン」の共同研究開発

完全一体型輸液セット“アンティリーク”

完全一体型輸液セット“アンティリーク”は2016年春、「プラットフォーム」の支援サービスを通して完成しました。医療従事者の抗がん剤曝露対策品として、海外のスタンダードである“外さない投与”を最大の特徴としています。

神戸市立医療センター中央市民病院様との共同研究の中で、臨床目線のご意見をを受けて完成した製品であるため、臨床に即しながら曝露対策品としての費用対効果も高く、全国の施設で導入され始めています。



より効果的な抗がん剤曝露対策として、 「アンティリーク」を導入

Interview 岡山大学病院 看護部 腫瘍センター 師長
がん化学療法看護認定看護師 西本 仁美さん

——曝露対策として新しく器具を導入されることになった経緯を
教えてください。

当院では2010年から院内ガイドラインを作成し、がん化学療法看護チームのリンクナースの活動により、个人防护用具の取り扱いやバックプライミングなど、各現場での曝露対策の実践に取り組んできました。2014年に厚生省から職業性曝露防止対策への取り組み推進の周知が出され、学会などへ参加し情報収集をおこなう中で、曝露対策としてCSTDの導入の検討を始めました。しかし、当院ではPPEとバックプライミングが定着しており、2015年に学会からガイドラインも出ましたが、さらにコストをかけてまで導入する必要はないのではという意見もありました。しかし、PPEやバックプライミングを徹底しても個人の手技にまかされており、抗がん剤を取り扱う機会の少ない部署では環境汚染など含め十分に曝露対策ができていないか疑問がありました。今回、病院執行部や看護部からも、CSTDも用いた曝露対策を取っていくことがより効果的で安全であるということへの理解を示してもらえ、アンティリークの導入が決まりました。

——アンティリークは「オートプライミングのため投与準備が安全で簡単」「完全一体型で外さない投与なのでまったく漏れない」「投与順序が『チューリップ』の歌詞の色の順番なので覚えやすい」などさまざまな特徴がありますが、アンティリーク導入の決め手は何でしたか。



当院では2017年6月から導入しましたが、導入前に外来と病棟3カ所の計4カ所で約1カ月半をかけ、他社製品とアンティリークの両方を使ってみました。いろいろな意見がありましたが、医療安全管理部をはじめ薬剤部、感染制御部など関係部署とも協議し、当院で今まで行っていた「側管を抜かない」バックプライミングと同様手技が行える「完全一体型」の方が、スタッフがあまり迷わないのではないかとことから、最終的にアンティリークに決めました。

——「完全一体型投与」が導入の決め手の一つになったとのことですが、
「完全一体型で外さない投与」についての安心感はいかがですか。

やはり安心して扱えることは大きいです。「完全一体型」ですから、バックプライミングで問題となっていた「接続部が外れる」というインシデントがなくなり、大きな手応えを持っています。



—実際にお使いになって特に好評だった点がありますか。

今まで500程のレジメンに対応した多くの組み合わせを作らなければならなかったのですが、アンティリークは組み立てる必要がないので手順がシンプルになったのも良かった点の一つです。実際に使いながら細かい点で改善してほしいところも出てきているのですが、その都度、コバヤシさんにお伝えしています。たとえば、フィルター付きとフィルターなしとの区別が個包装の外からはわかりにくかったのをシールに示すことで解決したり、またシールの位置も開けやすいように変えてもらったり。改善できるところは改善していただき、対応できないことも必ずお返事をいただけるので、小さなことでもお伝えしやすいですね。

—看護師の立場から、医療従事者の曝露予防のために、今後どういった対策が有効だと思われますか。

当院ではアンティリークを関係部署ですべて導入することが決まっていますが、各部署によって導入時期のタイミングを見計らいながら、よりスムーズに、そして安全に導入していけるよう、丁寧にサポートしていきたいと思っています。導入が決まったら、まずコバヤシさんによる扱い方などの研修を受けてもらうのですが、直接受けてもらうのが一番なので、スタッフ全員が受けられるよう研修会は数回開き、しっかり覚えてもらえるよう徹底しています。アンティリークの導入施設が増えているようなので、今後、コバヤシさんには各導入施設での使用感など情報をできる範囲で共有してもらえたらと思います。そうした現場からの声を取り入れた改善が図られ、より使いやすくなるように期待しています。曝露対策のヒエラルキーコントロールの概念から言えば、こうした曝露対策器具を使うのが効果的だとされていますが、どこの施設でも導入できるわけではありません。ですから、それぞれの現場での業務量やレジメンの内容、やり方などを考えて、実際の場面で曝露対策をどうとっていくか考えるのが看護師の役割かと思っています。



※生理食塩水によるデモンストレーションです。実際の使用装備とは異なります。

自分たちの職場の抗がん剤環境曝露の現状を知ることが大切

Interview 独立行政法人 国立病院機構 岡山医療センター
薬剤部 がん専門薬剤師・薬学博士 田頭 尚士さん



—今回行われた現行法と「アンティリーク」による抗がん剤曝露や施設の汚染蓄積状況の調査結果を受けて、どのように感じられましたか。

2017年10月下旬に、現行法と「アンティリーク」を用いて、患者さんに投与する部屋と無菌調製キャビネットでの計測調査を行い、ルートと室内全体それぞれを計測し、トータルで環境曝露を見ました。結果は思いもしなかった部分に漏れが見られたり、逆に想定していた部分でそんなに数値が出ていなかったり、イメージと実測値との相違を明確に知ることができたことが、まず大きかったですね。さらに、点滴の着脱時に漏れが生じやすいとされていますが、「アンティリーク」は着脱がないためゼロだとはっきりデータとして提示され、器具によってここまで違うのかと正直驚きました。専門の看護師が行ったので手技による違いはないわけですから。また、調査に用いた模擬薬に色が付いているので、曝露が可視化されて、よりわかりやすかったですね。看護師たちから「ここで漏れているんですね!」と声が上がりました。目視でのインパクトは大きいです。

このように自分たちの職場で実際に計測したものがデータとして提示されるので、非常に説得力があります。学会や研究報告などでデータは上がっていても、自分たちの職場ではそうでもないだろうと思ってしまうこともありうるので、リスクが伴っているのだという現状を把握しておくことの重要性をあらためて認識しました。

—薬剤師の立場から、今後、曝露予防のためにどのような取り組みをお考えでしょうか。

抗がん剤という薬のことなので、私たち薬剤師がインシアチブを取り、投与全体のリスクマネジメントをするのが役割だととらえています。データが出たばかりなのでフィードバックはこれからなのですが、今回の調査が抗がん剤による環境曝露を考えるきっかけづくりになればと考えています。すでに若いスタッフたちが、今回計測しなかった部位を測ろうと自分たちから動き始めているので、意識づけの一步になったのではないかと手応えを感じています。患者さんだけでなく、私たち医療従事者、そして業者さんまで、環境曝露の影響が少しでも軽減できるように取り組んでいきたいと思っています。



プラットフォームに関するお問い合わせ先



医療機器等事業化促進プラットフォーム事務局
公益財団法人 先端医療振興財団 クラスタ推進センター内
〒650-0047
兵庫県神戸市中央区港島南町1丁目6番地5号
国際医療開発センター(IMDA)2階 TEL:078-306-0719

製品に関するお問い合わせ先

株式会社コバヤシ 医療機器事業部
〒651-0084
兵庫県神戸市中央区磯辺通2丁目2番16号 三宮南ビル7階
TEL:078-414-8282 FAX:078-414-8281